
猫神お鈴さん

鯉庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫神お鈴さん

【Nコード】

N7883X

【作者名】

鯉庵

【あらすじ】

猫神が住むと言われる『鈴乃音町』。其処には大変仲の良い一組の夫婦が居りました。しかし、御婆さんが病で倒れ、お爺さんは猫神様に毎日お願いをします。

100度目のお参りを終えると、猫耳が生えた美しい女性が現れたのです

彼女の名は「鈴音」。彼女は此の地を守る土地神様だったので

プロローグ（前書き）

駄文すぎる

プロローグ

『またいらっしやったわ……もう丑の刻も過ぎているのに……こんな寒い中、素足でいらっしやるなんて……』

百度石に小石を積んで手を合わせる男性。随分お歳を召した殿方でございますね……手を合わせ拝むその者の願いが胸の奥へ伝わって参りました。なんて純粋な想い……力を失い消えかけていた私を温かな物で満たされて行きます。

「頼むぜえ……猫神様……まだアイツに死なれる訳にやいかねえんだ……」

身も凍る寒さの中、白い息を吐きながら毎度やってくる御老人。古くから土地神としてこの土地を守護して来た私も此処まで強い想いを感じる事は殆どありませんでした。名前はそう……善三……柳善三さん……街でも有名な愛妻家の御方。

聞けば、妻が不治の病に倒れどんな手を尽くしても直す事叶わぬとの事。丁度百度目のお参りの今日、私は願い人の前へと姿を現す事が出来ます……

『その願いしかと聞きました。貴方の心願叶えて差し上げましょう』

「……………」

『あ、あのどかなさいましたか……』

困りました。何の反応也没有せん。私は善三さんの顔の前に手を

翳し、大きく手を振ります。暫くすると瞳を見開いて大きな声を上げ、倒れ込んでしまいました。

『大丈夫ですか!?!』

慌てて駆け寄り手を差し出すと、冷静になったのか手を掴む事なく立ち上がって懷から煙管を取り出して煙を吹きました。

「あんた、一体何もんだ? いきなり空から降って来たあ……只者じゃねえな?」

『申し遅れました。私、この【鈴乃音町】の土地神を務めさせて頂いております。鈴音と申します……柳善三様、貴方は只今を持って土地神（私）との正式な『契約』を結びました……善三さまの心からの願い叶えて差し上げる事が出来るのです!!』

私は思わず両手を包み込んで握りしめます。あっけにとられた善三さまの顔は一生忘れません。

「此処が……善三さまのお家……」

私はその佇まいに暫く呆気にとられていました。歴史を感じさせる木造の家に立派な日本庭園。とても夫婦お二人だけで済んでいるとは思えぬほどのお屋敷でした。

「何やってんだい。さっさと入りな」

善三さまの声に私は我に返り、慌てて門をくぐりました。大きな音をたてぬ様静かに玄関の戸を開けて家の中へ入りました。

「ちと暗いかもしれんが、ついて来てくれ」

『あ、少し待って頂けますか？』

私は掌の上に光の球体を作り出しました。一瞬驚いた顔をされましたが直ぐに冷静な顔に戻って部屋へと案内して下さいました。

広々とした畳部屋の真ん中に布団が敷かれ、一人の女性が規則正しい寝息を立てていつらっしやいます。このお方が……

部屋に橙色の淡い光が灯ります。私は布団の前に正座をして、彼女前に手を翳しました。目を瞑り意識を集中させ奥様の身体を蝕む元凶を探り出します。しかし、これは……。

「どうしたい……」

『いえ……では、はじめます』

そう言って掌一点に力を集中させて一気に放出させると奥様の身体を淡い光が包み込み、ふわりと浮きあがりました。その光景に息を飲む善三様。無理ありませんね。

「どうなっただいこりゃ……まさか本当に」

善三様の言葉に私の胸が締め付けられました。

『いえ、残念ながら奥様……菊代さんを蝕む病魔を完治させる事は……出来ませんでした……病気の進行を遅らせ、私の力で一時的に回復させる事しか出来ませんでした……』

私は膝の上で拳を握り、唇を噛みました。すると、頭の上に何かが伸しかかる感覚がしました。顔を上げると、善三さまが微笑みながら私の頭を撫でて下さいました。掌から優しい想いが伝わって来ます。

「気にすることあねえさ……あんたはどうにもならねえ事を身を削ってやってくれた……婆さんが少しでも生きられる様にしてくれた。俺あ、それだけでも感謝してもしきれねえ……」

私の視界が涙で霞みます。上手く言葉が出て来ません。

すると菊代様の眉が動き目を覚ましました。ゆっくりと身体を起こすと驚いた表情をして善三さまを見つめておられました。

「あなた……私、夢を見ているのかしら……身体が凄く軽いの……まるで病気が治ったみたいに」

善三さまが菊代様の身体を抱き寄せ背中を撫でて喜びの表情を浮かべます。

「そうかい……そいつあ良かった」

「どうしたんですか？ あなた……」

「何でもねえよ」

私の心にも二人の感情が伝わって来ました……。素敵ね……。人はこんなにもお互いを思える物なのね……

「ナァ」

「あら……この子はどうなされたのです？」

善三さまはふっと笑ってこう答えました。

「散歩仲間だよ……」

プロローグ（後書き）

感想、突っ込み下さい
お願い致します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7883x/>

猫神お鈴さん

2011年11月10日19時41分発行